Dr Negishi's Assessment Clinic
評価クリニック

文法問題から何を知る

根岸雅史　Negishi Masashi
（東京外国語大学）

1．英語のテストと言えば文法問題

日本における英語のテストには，必ずと言っていいほど文法問題がある。英語のテストなのだから文法問題があって当たり前だろうと思われるかもしれないが，そうでもない。最近，大学入試の英語で話題になっているTOEFL iBTには文法問題がない。かつてのTOEFLには，Structure and Written Expressionというセクションがあり，これが文法問題に見えたりしていた。しかし，iBTでは個別の4技能とその統合のテストがあるだけである。

一方，定期試験でも高校入試でも，いわゆる文法問題と見なすことのできるテスト問題は必ずある。しかも，その種類も豊富だ。空所補充問題から，多肢選択問題，並べ換え問題など，出題形式が多様な上に，総合問題というカテゴリーでは，多種多様な問題が1つの文章にぶら下がっている。その品揃えは，あたかもスーパーかコンビニのようだ。

2．文法診断に役立たない文法問題

では，これだけ文法問題を出題しているのであれば，生徒はどのような文法事項が苦手で，どのような文法事項はさほど躓（つまず）きが少ないのか，というようなことがよくわかっているかというとそうでもない。生徒の文法事項の得意・不得意を先生方に聞いても，意外と正確には答えられない。「文法問題」自体の得意・不得意は言えても，「文法事項」の得意・不得意は言えない。

どうしてそうなるのか。これにはいくつかの原因があるだろう。1つは総合問題の影響である。総合問題では，様々な言語知識をバラバラに問うているだけなので，この結果からは，個別の文法問題の出来以外には，生徒の文法力について診断的な解釈を行うことはできない。

また，ごった煮の総合問題と比べると，空所補充問題は本当にすっきり見える。しかし，空所補充問題のように，一見，問題形式が統一されていても，問うている文法事項が様々であるために，どの「文法事項」について知ろうとしているのかがわからないことが少なくない。次の「空所補充問題」を見てみよう。

> 下の日本語の文の意味を表すように，カッコ内に当てはまる適当な単語を書きなさい。
> (1) Thank you（　　）this interview.
> このインタビューをありがとうございます。
> (2) I am glad to（　　）here.
> ここに来られてうれしいです。
> (3) I have never（　　）a Japanese joke.
> 私は日本語の冗談を聞いたことがありません。
> (4) How（　　）have you been on this tour?
> このツアーにはどれくらい参加していますか。
> (5) I've enjoyed（　　）with you.
> お話しできてとても楽しかったです。
> (6)（　　）pleasure.
> どういたしまして。
> 解答：(1) for　(2) be　(3) heard　(4) long　(5) talking　(6) My

それぞれのテスティング・ポイントは，次のようになるだろう。

(1) 前置詞　(2) 不定詞
(3) 現在完了（経験用法）　(4) 疑問詞表現

(5) 動名詞　(6) 慣用表現

これらの問題の出来からは，(仮にこれらの文が教科書の既習の文章からとられたものであることを別にしても)，「文法知識」があるとかないとか，穴埋め問題が得意・不得意という程度のことしか言えないだろう。

こうしたテスト・デザインになっているのは，もしかすると「定期試験」の文法問題が，熟達度テスト (proficiency test) の文法問題のデザインを踏襲しているためではないだろうか。熟達度テストとは，特定の指導を前提としていないテストである。そのため，熟達度テストでは，幅広い項目からサンプリングを行うことになる。この「幅広さ」は，「難易度の幅広さ」でもあれば，「サンプリングの幅広さ」でもある。「サンプリングの幅広さ」とは，この場合，「文法項目の多様さ」を意味している。このようにデザインすることで，「一般的な文法力」を測ることができるのだ。しかしながら，こうしたテストの結果からは，指導の柱となっていた特定の文法の知識の習得がどうなっているかについて，知ることはできないだろう。

3．定期試験における文法問題のあり方

それでは，到達度テスト (achievement test) である定期試験の文法問題は，どのように作るべきであろうか。

まず，定期試験でテストすべき文法項目のリストを作る。これらの文法項目は，その定期試験の対象となる文法項目の中から，評価対象とすべき項目を取捨選択する。教えた文法項目がすべて評価対象となることもあるかもしれないが，そのうちの一部だけが対象となることもあるだろう。また，文法項目の中には，グルーピングが必要なものもあるかもしれない。たとえば，分詞による前置修飾・後置修飾，関係代名詞による後置修飾，などが範囲であれば，これらは 1 つのグループに入ることになるだろう。このときに，グループごとの重みづけ，および，グループ内のそれぞれの文法項目の重みづけをし，それぞれに必要なテスト項目数も決めておくとよい。「分詞による前置修飾」についてであれば，「過去分詞」の場合と，「現在分詞」の場合があると考えれば，最低 2 問は必要だし，それぞれが規則動詞の場合と不規則動詞の場合と考えれば，4 問は必要となるということだ。

次に，それぞれのグループをどう測るかを決める。おそらくグループごとに相性のいいテスト方法があるだろう。たとえば，文型や上述の前置修飾・後置修飾などの syntagmatic な関係を見る場合であれば，並べ換え問題などとの相性がいいように思う。これに対して，時制や態の選択や前置詞の選択など paradigmatic な関係を問うのは，空所補充問題との相性がいいだろう。

ここまで来たら，それぞれのグループ内の文法項目を問うテスト問題を作成していく。これまでの準備ができているので，問題を作ることはそれほど困難なことではないだろう。ただし，文法問題に使う文が，どのような場面で，どのような意図を持って，誰が誰に対して発しているのかを意識して作らないと，おかしな文になってしまうことがあるので，注意が必要だ。

日本の定期試験における文法問題を見たときに，意外と 4 択や 3 択などの多肢選択式問題が少ないことに気づく。たとえば，空所補充式の文法問題であっても，それぞれの空所に対して複数の選択肢があるのではなく，全ての問題に対して複数の選択肢が「プールされている」ことが多い。こうした問題は，英文を作ったあと，ポイントの箇所を空所にして，下にそれぞれの空所に入る単語を集めればよいのだから作成が容易である。ただし，こうした問題作りでは，選択肢がそれぞれの空所に複数あるわけではないので，各テスト項目のねらいが見えない。

たとえば，am，is，are が選択肢にあれば，be 動詞の現在形の区別を見ているのだということがわかる。それに対して，because，so，but が選択肢にあれば，これは接続詞の使い分けを見ているのだということがわかる。多肢選択問題では，正解の選択肢と誤答の選択肢を作ることで，テスティング・ポイントが明確になる。

英語の定期試験は、指導の成否を見るために行う。だとすれば、定期試験の文法テストは，文法指導の成否を示さなければならない。そこに見える課題が，次の授業の課題である。